

はなし言葉と直接引用

— real-timeの発話での直接引用形について—

澤 田 茂 保

Quotational forms in unplanned speech

SAWADA, Shigeyasu

金沢大学外国語教育研究センター

『言語文化論叢』第15号

2011年3月刊

Foreign Language Institute

Kanazawa University

Studies of Language and Culture

Volume 15

March 2011

はなし言葉と直接引用

—real-time の発話での直接引用形について—

澤 田 茂 保

0. はじめに

次の抜粋は American Heartland と言われる Iowa 州の農村 Cedar Falls からの英語ニュースの中で聞いたインタビューの一部である。

"There's a lot of people around this community, and they were just like, 'he's nuts, he's got a screw loose or something and it'll never work.'" (ABC World News Tonight, Feb. 6, 2007)

中西部の中心地アイオワ州には山がない。山がないのでクライミングができない。さらに冬は簡単に氷点下になる寒冷地で、厳冬期には外で楽しむ遊びもない。そこで、ある人が寒い冬でも外で遊べる楽しいことがないか、と考えた。手製のシャワー装置を使って穀物用のサイロに一晩中水をかけていると、カナダ国境からの寒風でいくつも並んだ巨大サイロが氷壁に変わる。その氷壁を使えば、アイスクライミングができる、と思いついた。Don Briggs という 30 代後半から 40 歳代の男性が、初めは近所の人に馬鹿じゃないかと思われた、とインタビューに応じているところである。

注目したいのは下線部である。「あいつは馬鹿だ、ネジが外れているようなもんだ、うまくいくわけがない…」といった内容が、代名詞から明らかなように直接引用(direct speech)の形式になっている。直接引用であれば、標準的には They just said, "he's nuts, he's got a screw loose or something and it'll

never work.”となるべきだが、ここでは They were just like, “...”となっている。この[主語+be like+引用部]の形式（以下では、“be like 引用形”）は、real-time で進行する発話に現れる特徴的な表現で、80年代アメリカ西海岸から広まったとされるが、現在のところ辞書などでその語義や用法の記載が見られないものである。

本稿では、この real-time で進行する発話の中で見られる直接引用の表現形について考察する。第1節では、英語の標準的な直接引用形式について、その文法構造を必要な範囲で概観する。第2節では、be like 引用形に関する先行文献の調査から、その言語学的な位置づけについて触れる。第3節では、日本で入手可能な母語話者のインタビュー資料を観察して、標準形との対比から be like 引用形の事例研究を行う。第4節では、直接引用を導く go について考察し、標準的な引用形と be like 引用形との類似点と相違点を論ずる。

1. 英語の直接引用形式

英語で直接引用を導く語として典型的に使用される動詞は say である。まず、項の構造を考えてみる。say という行為(act of saying)の中には、「発話者(addresser)」、「聞き手(addressee)」、「発話内容(content)」の三つの参加者がある。この三つの参加者は無標な場合、(1a)のような形で現れる。聞き手は統語構造上では随意的で、文脈上で復元できるときは現れない。つまり、聞き手を殊更に明示する必要がない限りは現れない。一方、発話者が出所を示すものとして指標化されると、(1b)のように後半に移動する。小説の会話部分では発話者よりも発話内容が重要であるから、この順序が逆転した構造の出現頻度が高い。他方、発話者と発話内容がともに重要な新聞報道のような場合、(1c)のように、発話者が発話内容の途中に入った中間的な構造をとることが多い。

- (1) a. She said to him, “I’ll call you later. Let’s talk about it then.”
 b. “I’ll call you later. Let’s talk about it then,” she said.
 c. “I’ll call you later,” she said. “Let’s talk about it then.”

また、言うまでもないが、現代英語では、主語が代名詞でないときは、(1b-c)の構造において主語と動詞の倒置が起こる¹。

say という行為にはある種の「移動」が感じられる。引用される内容が発話者から聞き手へ向かって「流れている」からである。そのため、聞き手は移動の着点を表す to によって具現される。to NP が統語上現れる場合、(1a)の形式が多い。一方、情報の流れの方向性よりも発話内容が優位にある(1b-c)では、to NP が現れることはほとんどない。

他に標準的な直接引用動詞として、次のような例がある。

- (2) a. He thought, "Am I right?"
 b. He told her, "Don't forget it."
 c. Jesus asked him, "What is your name?" (Luke 8:30)

say では、発話内容が音声によって表出され、聞き手に向かって「移動」するが、think の場合は、頭の中のことなので、聞き手が原則として存在しない。従って、(2a)のように、to NP は統語的にふつつ現れない²。(2b)や(2c)のように、ask/tell も直接引用部を伴う構造が見られる。ask/tell では聞き手は前置詞句 to NP で表されず、直接目的語として現れる。その理由は、これらの動詞の本質は発話動詞ではなく、伝達動詞だからで、「伝わった」ことを含意しているからである³。

英語には、say/think/tell/ask などの動詞の他に、直接引用を導いて使われる動詞が実に多い。小説ではこのような事態が即座に分かるので、事例で見てみよう。次の文は *Harry Potter and the Chamber of Secrets* の冒頭の数行である。

- (3) Not for the first time, an argument had broken out over breakfast at number four, Privet Drive. Mr. Vernon Dursley had been woken in the early hours of the morning by a loud, hooting noise from his nephew Harry's room.

'Third time this week!' (a) he roared across the table. 'If you can't control that owl, it'll have to go!'

Harry tried, yet again, to explain.

'She's bored,' (b) he said. 'She's used to flying around outside. If I could just let her out at night...'

'Do I look stupid?' (c) snarled Uncle Vernon, a bit of fried egg dangling from his bushy moustache. 'I know what'll happen if that owl's let out.'

ハリーの発話の(3b)には標準的な say が使用されている。他方、(3a)と(3c)では動物の発声を連想させる roar や snarl が使われていて、作者が言葉のやりとりに別のイメージを「重ね合わせている」ことが分かる。いずれの場合も聞き手は文脈上復元されるので現れていない。

まず、(3a)を見てみよう。これを he said across the table としてもいいが、それは無味乾燥な発話事態を表しているに過ぎない。この場合の across the table は音声の移動経路を表していて、発話の行為に移動が感じられていることを示す⁴。英語で、「吠える」ような大声で言った、という事態を表す方法が二つある。一つは in a roaring voice/ tone といった前置詞句で迂言的に表す方法である。もう一つは、(3a)のように、音声様態動詞 roar を say として使い、say という行為と発話様態とを「重ね合わせ」させる方法である⁵。(3a)は say の持つ項構造のフレームに、roar の持つ様態部を貼り付けて、ハリーの従弟が大声で言ったことに動物の発声を重ね合わせているのである。

(3c)も同様である。snarl は犬が歯を見せてうなっている様子を連想させる音声様態動詞である。snarl を人に使うと、相手を見下してぞんざいに言う感じを与える。この特殊な語感を say では表すことは困難であり、snarl の音声様態を借りてきて、say のフレームに重ね合わせている⁶。(3c)の例では発話者は代名詞ではないので倒置が起こっている。そして、(3c)の後に続く表現群はバーノン叔父がひげから汚らしく卵のカスを垂らしている様で、発話者の「発話時の様子」を表している。つまり、(3c)では、発話内容と共に、発話者と発話様態、発話時の様子にあたる要素が表現されている。

発話時の様子は発話時の背景的情報としてジャーナリズムではよく見られる。新聞報道では、記者の分析と取材対象者からの直接引用を組み合わせることで記事が構成される。(4)は劉曉波氏が2010年度ノーベル平和賞を受賞したときの北京の模様を伝えた記事の一部である。

- (4) “I’ve never heard of him,” said one Beijing businessman, waving his hand dismissively, who gave his family name as Han, in comments typical of those heard on the street when Liu’s name is mentioned. “I’ve too busy to watch television.”

(The Daily Yomiuri, October 10, 2010)

引用は政治的に重要な人物のものではなく、北京の一般市民の発話で、一種の無関心さを表す発言として直接引用されている。この例では、新聞記事によく見られるように、引用部の途中にかなり長い表現が入ってきている。waving his hand dismissively が、「発話時の様子」を表しており、発話時の発話者が「あっちへ行ってくれ」といった態度であったことを伝えている。基本的に発話時の様子は随意的であるが、say という行為を彩るものとして広義の say と共起する要素と見なすことができる。

直接引用を導く say が共起しうる参与者・要素を表にまとめると次ようになる。

話し手 (addresser)	聞き手 (addressee)	発話内容 (content)	発話の様態 (manner)	発話時の様子
義務的	随意的 <経路>	義務的	無標だが、様態 動詞と conflate	任意で、書き言葉では多い

表 1

say という行為が起る事態を更に広義にとれば、書かれた言葉では「書き手 (writer)」が含まれるが、ここでは詳しく触れない。

以上述べてきたことは、書かれた言葉(written language)の観察から見られる英語の直接引用の特徴である。話される言葉(spoken language)、とくに real-time で発話される unplanned speech では、例えば、(1b-c)のような形式では現れず、もっぱら(1a)の形式である。他方、(1a)の形式でしか使われず、それ故に unplanned speech でしか観察されない引用形式というものがある。それが冒頭の be like 引用形である。次節では、be like による直接引用について先行研究を見てみる。

2. be like の発生と意味

be like 引用形が文献で初めて言及されたのは Buttlers (1982)である。それは後述の go の用法に関する語法記事へのわずか5行のコメントの中であった。筆者が 2000 年代に入ってこの表現形式に気づいたときに、カリフォルニア出身の当時 40 代男性から、高校生の時に「そういう表現が使われていた」と聞いたことがあるが、おそらく 70 年代後半から 80 年代にかけて若者的表現として始まったものと考えられる。90 年代には語法論者らによって新規な引用形として論文として取り上げられるようになり (Blyth et al. 1990)、その後、be like 引用形は使用される範囲が急速に広まっていることから、社会言語学者の注目を集めることとなっている。

例えば、Ferrara and Bell (1994)は、テキサス大の大学生を使って、1990 年、1992 年、1994 年に自己の語り(personal narration)のデータを収集して、be like 引用形が漸次的に広がっている模様を示している。Cukor-Avila (2002)では、テキサス州の田舎町 Springville の黒人コミュニティでの言語使用を 12 年に渡り継続的に記録し、言語変化の実態を調査しようという息の長い研究の一部だが、ここでは都市部から地方部へ be like 引用形の伝播を指摘している。いずれも社会言語学的な観点からテキサス州の話者を調査しているが、be like 引用形が性差、年代差、地域差を超えた広範な言語拡散(language diffusion)の事例で、それもリアルタイムで進んでいる状況が分かる。冒頭ニュースは 2007 年のアイオワ州の田舎からのものであることから考えると、現在ほぼアメ

リカ全土で使用されていると推測される。

10年前まではアメリカ国内での調査が主であったが、Tagliamante を中心とした研究グループが、アメリカ以外の英語圏での調査研究をおこなってからは、be like 引用形の拡散が英語圏全体の現象として進行していることが明らかになっている。例えば、Tagliamante and Hudson (1999)では、アメリカ発の be like 引用形がイギリス英語やカナダ英語に広がっていることを若者のインタビューのコーパス・データから示している。イギリスやカナダでは、アメリカと比べると言語変化の進行が若干遅れていて、発話者の人称がまだ1人称に限定されている、引用内容が non-lexicalized sound や internal dialogue に制限されている、といった指摘がある。一方、浸透度はイギリスの方が若干高いと指摘し、言語拡散が単なる地理的な理由だけではなく、be like 引用形がカナダでは直接引用を導く go や think と競合関係にあるが、イギリスでは go の用法がないので、その分浸透を許しているからである、といった興味深い指摘がある。また、Tagliamante and Alexandra D'Arcy (2004)は、カナダの若者英語の調査で、とくに若者や女性を中心に広がっている実態を指摘している。

be like 引用形が語法や社会言語学の専門誌から言語学のメジャーな学術誌に登場する嚆矢となったのは Tagliamante and D'Arcy (2009)である。ここでは、形態統語上の変化が音韻変化と同じいわゆる adolescent peak があるかどうかを論じたものだが、その変化をみる六つの指標の中に be like 引用を上げている⁷。

先行する社会言語学的な研究をまとめると、概略次のようになる。

- (5) (a) 発話者は本来的には一人称であったが、90年代後半には二人称・三人称にも広がっている。
- (b) 引用内容は、初めは unuttered thoughts が主であったが、実際に発話された引用へと適用の範囲が広がっている。
- (c) 地域的には、80年代アメリカの西海岸の都市部で発生したが、アメリカ国内では非都市部へと広がって、またイギリスやカナダなど他の英語圏でも使用されている。

(d) 年齢的には、初めは10代の若者の表現だったが、90年代後半の調査では高い年齢へと範囲が広がっている。

(e) 性差としては、初めは女性に使用頻度が高いとされていたが、男性へと波及している。(また、男性の方が使用頻度が高い、という調査もある)

be like 引用形は出現が新しく、社会言語学の分野で男女間、世代間、地域間、人種間の分布と拡散、都市から地方への拡散といった多様な変項域で、現在進行中の言語拡散・言語変化の好個の例として取り上げられている。

be like 引用形は、英語に単なる新規な表現が加わったという些末なことではなく、言語変化・拡散の現象がリアルタイムで観察できることで、社会言語学上重要視されている。こういったリアルタイムの変化が単なる主観的な観察から客観的な証拠として提示できるのは、ひとえにコンピュータ技術の発達で比較的大規模なコーパスなどを構築して、簡単にデータの処理が可能になったからである。従来言語変化はすでに収束し、安定的になっているものを、主として書かれた言葉の中に残る痕跡をたどって変化の過程を分析するという手法がとられる。それでは現在進行中の現象としてみることは不可能である。しかし、be like 引用形の出現とその拡散は80年代からで、それはちょうどコンピュータ技術の言語分析への応用と軌を一にしている。その点でbe like 引用形の研究は社会言語学上でユニークな位置を占めている。高名な社会言語学者 William Labov によると、be like 引用の拡散は、”one of the most striking and dramatic linguistic changes of the past three decades”であると述べている⁸。しかし、これはbe like 引用形の特殊性というより、言語学が利用するテクノロジーの発達と時期的に一致しているからであろう。

さて、be like 引用形の教育上の扱いはどうであろうか。先に述べたように、be like 引用形は日本の辞書ばかりではなく、欧米の主要な辞書にもまだ記載がないので、日本の教育関係者の目を引いていないと思う。辞書にはないが、Carter and McCarthy(2006, 102)は、さすがに”comprehensive guide to spoken and written English grammar and usage”というだけあって、(6)の2例を挙げている⁹。

- (6) a. So this bloke came up to me and *I'm like* 'Go away, I don't want to dance.'
- b. And *my mum's like* non-stop three or four times 'Come and tell your grandma about your holiday.'

Carter and McCarthy (2006)では、be like 引用形を話し言葉での挿入語(filler)の like や it's like などと並記するだけで、確かに事例の記載はあるが、非母語話者に有用な情報は残念ながらと言わざるを得ない¹⁰。次節では、be like 引用形の実例を観察して、非母語話者に有用と思われる語法上の特徴を考察したいと思う。

3. 事例研究：be like 引用形

前節で述べたように、社会言語者ですら驚くほど急速に be like 引用形はアメリカに限らず英語圏全体に拡散している。そのため辞書への語義記載は時間の問題であり、また日本での英語教育への波及も不可避である。日本人学生が20代前後で留学すれば、友人との会話でこの表現に必ず接するはずである。話していれば分かるので、わざわざ教科書で取り上げる必要はないといえるかもしれない。しかし、現在の破壊的な浸透度から言えば、若者同士の対話を可能な限り authentic に近づけると、say や think だけで片づけることはできない。その場合、be like の分布とその働きについて、英語教員はある程度の理解をしておく必要がある。

本節では、be like 引用形について、第2節で述べたような社会言語学的な関心からではなく、どのような文脈で使用されてやすいのか、また、say など標準的な引用と比較してどのようなニュアンスを持っているのか、といった点にいわば語法論的・使用論的な立場から考察したい。be like 引用形は unplanned speech で顕著に見られる表現で、書き言葉はもちろんのこと映画やドラマの SCRIPT など unplanned でない素材にはほとんどない。そのため日本で入手可能なインタビュー・データを利用することにした¹¹。

まず、be like 引用形の出現頻度はインタビューの内容に相当程度依存する。個人的な経験について回想しながら、相手との対話を語るような発話環境で多く出現する。実業家や小説家などのインタビューでは、仕事や作品などの説明などが多く、そもそも be like 引用形の出現する環境が少ない。また、性差も含めた個人差があり、立て続けに使用する人もいれば、全く使わない人もいる。こういった複雑な要因が存在することを念頭に置いた上で、be like 引用形の語法論的な考察を行う。

(7)は女優 Cameron Diaz が映画 *My Sister's Keeper* (邦題『私の中のあなた』) で共演した子役の Abby が撮影中でないのを知らずに泣く演技をしているところを語っている¹²⁾。

- (7) And you know, Abby's crying off-camera, (a) I'm like, "Sweetheart, you don't have to cry off-camera." (b) She's like, "it's OK. I got it," and (c) I'm like, "She's got it. OK, she's got it." [09_11_63]

まず、say と異なって、be like 引用形は決して聞き手を表す表現と共起しない。このことはインタビュー・データから分かる顕著な特徴である。<be+like> が to NP を認可できないといった統語的説明が可能かも知れないが、それよりも、be like 引用形は、語り手からみた発話者 (=主語) の「気持・感情」を引用によって表す働きがあり、第三者に対する純粋な意味での情報伝達ではない、という機能に理由を求めるべきである。従って、ふつうの情報伝達であれば必須の聞き手という参与者を想定しない。また、第1節で見たように、標準的な直接引用ではしばしば発話者の発話時の様子を表す表現が伴うことがあるが、資料としたインタビューには、be like 引用形が発話時の様子を表す付加句と共起する事例は一切ない。be like 引用形自体がある意味で発話時の様子を表しているとも言えるので相性が悪いのであろう。

次に時制を見てみよう。(7)は過去の出来事を現在起こっているかのように述べるときの historic present である。be like 引用形は、その多くが個人的な過去の経験の語りで見えて、過去であっても目の前で起こっている感覚・現前性

が強く、生き生きとした感じを与える効果を持つ。これを(8)のように言えば、その生き生きとした感覚が失われ、発話内容を情報として伝えるだけである。

- (8) You know, Abby was crying off-camera. (a)I said, “Sweetheart, you don’t have to cry off-camera.” (b)She said, “it’s OK. I got it,” and (c)I thought, “She’s got it. OK, she’s got it.”

(8c)は実際に発話したわけではなく、自分が心でそう思ったことなので、I thought で表した。このように be like 引用形はすべてが say となるわけではなく、think と say の境界を持たないからこそ存在意義があるのかも知れない。

しかし、過去形の be like 引用形もある。同じく Diaz のインタビューの例だが、映画 My Best Friend’s Wedding で映画の中で囃らずも歌うことになった個人的経験の語りの部分である¹³。

- (9) I have to say that Dermot Mulroney was awesome in that scene, ‘cause we kind of got psyched up. (a)I was like, “I’m a terrible singer.” (b)He’s like, “You’re a terrible singer.” And (c)I’m like, “No, I’m really a terrible singer.” (d)He was, “I know you’re terrible,” and (e)I was like, “Ah.” So then, I had to go out there and sing. [06_04_12]

「自分は歌が下手だ」だというやりとりを想起して語っている。(9a)から(9e)の初めと終わりは過去形だが、途中の(9b)や(9c)で現在形になっている。インタビュー資料では、be like 引用形は過去の出来事の想起でありながら、途中で現在形になることが多いことが観察される。これは現前性を高めるためであろう。(9)では短い引用を導いて、コミカルなやりとりが生き生きと想起されるといえる。

さて、(9d)では be が直接的に引用部を導いている。これは like が抜けている be like 引用形の変異と見なすこともできるだろう。しかし、like の欠落に

よって語感上の違いは若干あり、like がないと発話がより直接的で、単純な応答であった語感がある。

- (10) a. Stephen Hopkins, ..., was going to direct 24 and asked me if I would be interested in doing television, would I even taken a look at it. I was, “Yeah, I’m very open to doing television.” I had no idea what that meant. [05_10_38]
- b. The next day I said, “Lucia, I couldn’t get to sleep till three.” She was, “Me, either!” It was amazing. [05_07_12]

例えば、(10a)は映画俳優として名をなした Kiefer Sutherland に対して、テレビ番組『24』の監督が、おそろおそろテレビをやってみないかと聞いたら、「テレビをやることには偏見はない」と答えるところである。I was like となれば、自分の気持ち・感情としての表出であるが、I was では、次の I had no idea what that meant から分かるように、考えずに「単純応答」した語感である。I said simply/without thinking といった感じである。

また、(9e)では間投詞的表現(interjection)のみを引用部としている。これは be like 引用形の原義的な用法である。同様の例として、(11)は「仕事でやり遂げたなと感じるときは」と聞かれて、Denzel Washington が答えるところである。

- (11) And I was sitting around, and I was looking at this big house, and all this, I have all this stuff and I was like, “Wow!” ... I was like, “Wow!” I said, “What do you, what do you want? You got what you, you know, you, you have a car, you don’t need a car, you know, you know obviously I’m not a big time dresser and jewelry person. I don’t want it all. What do you want, Denzel?” [10_07_68]

ここでは間投詞的表現には be like 引用形が使われ、その後の具体的に言葉で

自問するところは、say が使われていることが注目される。be like 引用形は即場面的な感情の表出で使用され、say は比較的内容がある引用で使用される傾向がある。

(12)は、インタビュアー(I)がユダヤ人を両親に持つ女優 Natalie Portman(P)に、どんな音が嫌いか、と聞いて、彼女が答える部分である。

(12) P: The siren in Europe.

I: You..."ba boo, ba."

P: You'd think they'd change those after World War II, you know.

(a)It's like, "I'm Jewish, it freaks me out, OK?"

I: You mean, "Ba boo, ba boo, ba boo."

P: It's so Holocausty. (b)I'm like, "Eek!" [05_08_28]

(12b)は間投詞を導いているが、ここでも I say は不自然である。I feel like saying...といった説明文を使っても不自然で、be like 引用形が一番ふさわしく、他の形式で置き換えることは難しい。このような感覚的な表現を導くのが be like 引用形の原義であったと推察され、そういった感覚表現に富む若者会話に起源を持つのは首肯できることである。

さて、(12a)は be like 引用形に一見すると似ているが、主語が人ではなく it である。これは it は先行する部分を指している。

(13) a. So working with David, it was like, "OK, so let's, you know, let's see what you've got to ..." [10_05_69]

b. ...because she is fickle and unabashedly. It's like, "I'm allowed to make mistakes and I'm gonna do it and I'm gonna do it right now and I'm not gonna be ashamed of it."

[10_05_66]

like が引用部を導いているが、it は先行の内容で、(13a)の場合、working with

David を指している。従って、A is like B の基本義であり、この形式については本稿では触れない¹⁴。

間投詞は即場面的な感情や気持ちの最も直接的な表現なので be like 引用形と相性がよいが、即場面的な感情や気持ちが複雑な内容として言語化される場合も当然ある。(14)では、いい俳優はいい監督になれないという人に対して、『クリント・イーストウッドやロバート・レッドフォードはどうか』と思う」と答えている部分である。

- (14) I've spoken to certain people in this industry who've said, like, you know, actors make absolutely the worse directors, and, which I completely di..., I'm like "what about Clint Eastwood, what about Rob Redford, you know, what about Steve Buscemi? What about all of these?, you know, Sydney Pollock?" and I couldn't disagree more. [07_01_12]

明らかに、実際に音声によって発話されたのではなく、心の中で思っていることを直接引用として語っている。しかし、(14)には引用符が付けたが、実際の発話では引用部の切れ目が曖昧である。それは real-time の自己の語りでは、全体が"constructed dialogue"であり、そもそも明確な境界がない¹⁵。こういった語りでは、他人の言葉も自分の言葉も主観的な方向に変位し、be like 引用形が多用される原因となる。

(15)は、語り手が日本の皇太子夫妻に招かれて対談したとき、皇族と話すときのプロトコルを事前に教えられていたが、それを思わず無視することになった、と話しているところである。

- (15) And I was told that someone would knock on the door, like twice, um, when I had five minutes, and then they'd knock again when my time was up, and I had to politely excuse myself from the conversation. But on the second knock, ^(a)I was like, "Oh," you

know, “Thank you very much. Um, I’d better go, better be going. I’d better let you go,” and (b) they’re like, “Oh, no, oh, wait, we want you to sign something for us!” and so (c) I thought, “OK, well, I’ll, I’ll hang around then, and, um, better sign,” you know, “better do as they say,” and um, not knowing that I was, you know, creating quite a stir outside. [08_11, 49]

(15b)は語り手が皇族の発した言葉を伝えているのではなく、自分の目から見た皇太子夫妻のあわてた様子、つまり主観的な様子を直接引用で表しているに過ぎず、純粹な constructed dialogue であろう。過去の出来事の語りの中で、(15b)だけが現在形になっているのは、その部分を生き生きと伝えたい心理が語り手に働いているからである。

インタビュー資料から、be like 引用形の顕著な特徴は主語が代名詞である。代名詞であれば、冒頭の事例のように、発話者が二人称であろうと、三人称であろうとほとんど抵抗感はないと思われる。Carter and McCarthy (2006)の例には、my mum が発話者である事例を引用しているが、今回調査したインタビュー資料では、代名詞以外は (16b)の1例だけであった。

(16) ...that I was underage or whatever. I was 16. So, the next day, I went to my mom and (a) I said, “Hey, this guy gave me a card, he said for us to call him and maybe model.” And (b) my mom’s like, “Do you wanna do?” And (c) I was like, “I don’t know,” and (d) she’s like, “Well you wanna check it out?” And (e) I said, “Yeah, it can’t hurt.” There you go. [06_04_08]

C&Mの事例と同様、このような my mom は第三者の固有名詞ではなく、会話内・談話内ではすでに既知の指示対象であり、いわば準代名詞的である。be like 引用形が個人的経験の語りで現れ、すでに談話に導入済みの人について、そのやりとりを想起的に述べるため、代名詞が多くなると考えられる。

ここで第1節での概観した無標の直接引用動詞 say と比較して、インタビュー資料の観察から分かった be like 引用形の特徴をまとめてみる。

- (17) a. 発話者は基本的に一人称が多いが、二人称・三人称もある。
 b. 発話者に現れる語形は代名詞形にほぼ限定される。
 c. 発話の最後や途中に移動することはない。
 d. 引用内容は義務的であるが、情報を伝達するためではなく、発話時の即場面的な感情・気持ち言葉になったものである。また、心の内部での即場面的な感情・気持ち・思いで音声になっていない場合もある。
 d. 聞き手が統語的に現れることはない。
 e. 発話時の発話者の様子の表現を伴うことはない。

be like 引用形は標準的な引用形 say と比較すると、(17)のような制限があり、相当に限定的な環境でしか使われず、汎用性が高いとはとうてい言えない。しかしながら、この形式が勢いを増しているのは、ある種の会話上の機能を担っているからであろうと思う。その機能は、語りの中で一種の感性的なやりとりを表現できることである。real-time の語りでは、過去の事態を生き生きと伝えるために、ある程度は感性的な語りへと傾斜してしまいがちで、be like 引用形が real-time の発話に顕著に見られることになる。

4. 直接引用を導く go

go には、be like 引用と同じく、real-time で進行する発話で直接引用を導く用法がある。この go の用法は Butters (1980)で指摘され、be like 引用と違って、新しい辞書には記載がある。1980年版『研究社新英和大辞典』には記載がないが、例えば、(18a)は1988年版『大修館ジーニアス英和辞典』、(18b)は電子辞書版『ジーニアス英和大辞典』の記載で、(18c)は1998年版 New Oxford Dictionary of English の記載である。(c)のみに事例が挙げてある。

- (18) a. 他動詞 6 《略式》...という(say)(◆直接話法の伝達動詞として)
 b. 他動詞 9 《非標準》[伝達動詞]「...」と言う(say)
 c. 4 [no obj. with complement]
 ■[with direct speech] informal say: *The kids go, “Yeah, sure.”*

英和辞典の記述は若干不正確で誤解を与える。後述するように、go は伝達動詞とはいえない。また、《略式》や《非標準》は話し言葉のモードと限定的に解釈する必要があるだろう。(c)は短い部分によくまとめてあるが、これだけでは say と語法上の違いが分からない¹⁶。

本節では、直接引用を導く go (以下、go 引用形) について、インタビュー・データの観察を通じて、標準形の say や特殊な be like 引用形と比較して、どのような違いがあるか考察する。

- (19) a. I think it’s something that happens inside, too, that just kind of permeates, I think when you see someone and you go, “That person’s strong,” very often it doesn’t have anything to do with their physicality. [06_02_42]
 b. No, there’s a time when you step into it and you just go, “Well now, I’m kind of on the roller coaster” and with that, means “I’ll be kind of brave and throw myself into it and not worry if I fall flat on my face.” [05_10_12]
 c. I remember getting the e-mail, sending John, I go, “John, you gotta e-mail Leigh Ann and ask her what nightgown she wears.” You see John going, “Uh...” ‘cause he knew what the reply was gonna be, And all he gets back from Leigh Ann is, “you all need to get a life.” [10_09_94]

(19)の go や going は直接引用を導いており、ふつうの自動詞 go の用法とは違う。主語は常に人であり、ここで go や going を say や saying と置き換えても

意味上大きな変化はなく、be like 引用形と共通する点が多い。まず、主語に現れる発話者に人称の制約はなく、また基本的に代名詞形である。そして、引用の直前に現れて、say のように途中や後ろに移動することはなく、聞き手の要素と共起することもない。

時制については、(20)のように過去形もある。

- (20) a. But I remember the first time I came to America and I walked onto the Paramount lot and I went, “Oh, so this is like what it is!” I mean, it inspires awe. It just does. [05_10_16]
- b. No, no. So I had no idea at all. I mean, it was the first time I met Tony, or the first time I read the script, obviously, that I kind of went, “Oh, that’s interesting.” [06_02_14]

引用内容は思考結果としての発話ではなく、何らかの理由で、その場で「思わず」口から発せられているといった点が共通する。聞き手が場面には存在したとしても、相手に伝えるつもりで発話したのではなく、思わずクチから出たので聞き手が現れることはないわけである。be like 引用形では to NP を統語的に取ることができないという説明が可能であったが、go は動詞としては to NP を取ることができる。しかし、実際の使用例では聞き手と共起している例は皆無である。この聞き手が想定されていないことは be like 引用形と go 引用形の顕著な特徴である。

直接引用部が単純な内容でしかないか、といえは必ずしもそうではない。(21)は、女優 Sandra Bullock が、映画 The Blind Side (邦題『幸せの隠れ場所』)の实在の女性 Leigh Ann について、どのような影響を受けたか、と聞かれてのところである。

- (21) ... one of my biggest questions was how people use their faith in their religion as a banner, and then they don’t do the right thing, but ^(a)they go, “I’m a good Christian, and I go to church, and this is

the way you should live your life.” (b)I told Leigh Ann, (c)I said, and this was in a live interview we had, (a)I said, “One of my largest concerns in stepping into this was that whole banner-hold.” (c)I said, “It scared me because I’ve had, uh, experiences that haven’t been great. I don’t buy a lot of people who use that as their, you know, shield.” [10_09_93]

Leigh Ann の生き方に比べて、正しい生き方をしていないのに、敬虔なクリスチャンであると発言している人達を非難しているところである。say であれば無味乾燥な発話事態であるが、go を使うことで、内実はどうであれ、そういうふうに「通している」といった語感、あるいは、本音は知らないが、口からそういうふうに「出ている」といった語感があると思う。内容が確かに複雑ではあるが、go を使う意図が感じられる。

他方、(21b)では、tell を使っているが、途中で say に言い換えていることは注意すべきであろう。tell は小説などで直接引用を導いて使われるが、「伝わったこと」を含意した動詞なので、real-time での発話ではいわば「言い過ぎ」となり、直接引用とは相性が悪いのである¹⁷。

go 引用形の語感を直接的に伝えている好例が(22)である。映画 Million Dollar Baby のボクシング場面の撮影で、主役である語り手 Hilary Swank は人を殴った経験がない。それで、練習で相手を殴るたびにトレーナーに思わず Sorry とあやまってしまうが、それに対してまた叱られそうになり、Sorry と口に出そうなところを止めた、というところである。

- (22) The first time I hit somebody, (a)I said, “Ah! Sorry,” and my trainer about threw me out of the gym. Then (b)I said to him, “Sorry!” (c)He’s like, “You’re still doing it!” And (d)I went, “S...” and stopped, ... [05_7_6]

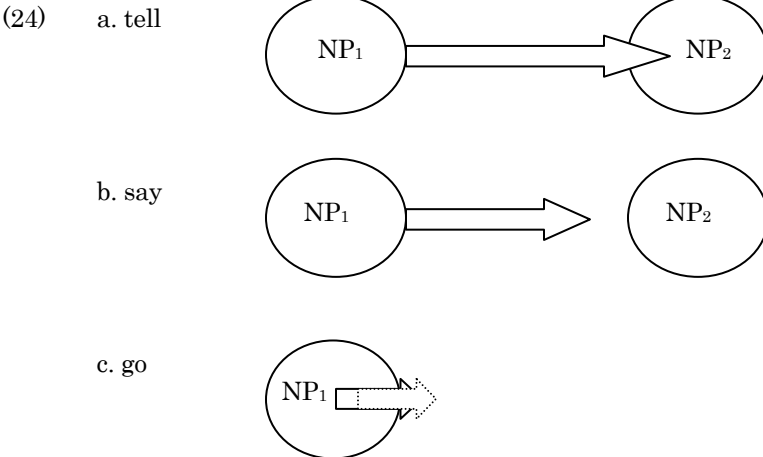
(a)と(b)では、“Sorry”と言葉にして言ったが、(d)では「音」にしか過ぎず、こ

ここで say を使うことは奇異である。I almost said, “Sorry.” とでもしなければならぬであろう。しかし、go を使えば、「口から発せられた」音を直接的につなげることができる。(c)は、即場面的なトレーナーの様子を引用によって表している。『「まだいってるのか!』って感じで...』といった意味である。

ここで go 引用形を標準的な say/tell と比較してみよう。構造的には(23)のようになる。NP1 は発話者、NP2 は聞き手、X は引用内容である。

- (23) a. NP₁ tells NP₂, “..(X)..”
 b. NP₁ says (to NP₂), “..(X)..”
 c. NP₁ goes, “..(X)..”

直接引用を導く tell/say/go のイメージを図で表すと、概略(24)のようになる。矢印は tell/say/go に感じられる発話の方向で、X の「移動」の経路を模式的に表している。



tell は伝達動詞なので、NP1 から発せられた内容が NP2 に到達して、中に食い込んでいる。つまり、tell では、聞き手は行為の直接的な影響を受けており、理解されていることが含意されていることを示す。一方、say の場合は、聞き

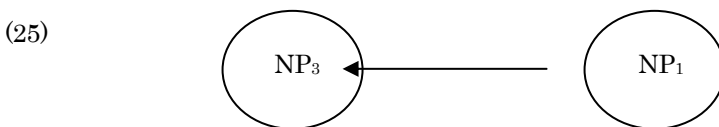
手へと音声として移動していることは明らかであるが、到達まで含んでいるとは言えない。つまり、食い込みがない。脚注で触れたが、throw a ball to the boy が「相手に受け取れるように投げる」意であるように、say では伝わることを期待して発話しているものの伝わったことまでは含まれていない。

では、go 引用形はどうか？go は聞き手を想定しないので、tell や say と異なって、そもそも模式図の中に NP2 がない。また、「動き」の方向は感じられるが、発話者から出る、つまり、「口から出た」ことに焦点があり、「伝わって」移動していく経路部分は前景化されていない。音声が出ることに焦点があることから、X についても情報伝達のための内容ではない。この点で、go 引用形は「(鐘や銃が) 音を出す(The gun went bang)」や「(動物が) 鳴く(The ducks go, “Quack.”)」といった go の用法とつながっていることは明らかであろう。go 引用形の語義分化はそこから生まれたものと推測される。

さて、be like 引用形に立ち戻って、(24)で試みた図による表示を応用してみよう。be like 引用形は、現在言語変化・拡散のまっただ中にあり、全体を一つの図で表すことは困難である。比較的原義に近い(15b)で考えてみる。

- (24) a. NP₁ is like, “..(X)..”
 b. ...they’re like, “Oh, no, oh, wait, we want you to sign something for us!” =(15b)

(24b)は、実際の発話かどうかは不明で、「語り手」からみて発話者である they が「そういうふうなことを言っている」と感じたことを伝える。従って、もし方向があるとすれば、NP₁ から出て、方向は語り手に向かっていると思う。語り手を NP₃ で表せば、(25)のようになるだろう。



be like 引用では聞き手の NP2 は想定されていないのは、NP₃ が意味上の聞き

手だからである。NP1 自体から情報・音声が実際に流れているとは言えないので、(23)の矢印と質的には異なる。

be like 引用形が語義として unuttered thoughts だけを表していた最初の段階では、NP1 と NP3 が一致しており、その場合は主語は一人称でしかあり得ない。なぜなら、語り手は常に一人称だからである。ところが、第2節で述べたように、be like 引用の言語変化・拡散のプロセスで、NP1 と NP3 が分化し同時に NP3 が背景化されて、内なる発話でしなかった内容が、実際の発話を表すときにも使われ始めたものと推測される。その意味で、be like 引用は現在の段階では(25)から(24b)への過渡期で、そのうちに NP2 を伴うこともあるかも知れない。

5. まとめ

本稿では、real-time で話される発話に特徴的な引用形式として、be like 引用形と go 引用形について述べた。be like 引用形は即場面的な感情や気持ちを話し手の主観的な視点から、相手の言葉の引用として語るときに使用される。real-time での個人的な語りで頻出するのは、like の原義が情報伝達でない感性的な発話と相性がよく、また音実態の有無を曖昧にしたままに使用できるからである。「...といった感じ」というような感性的な語感が標準的な直接引用動詞では表せないため、その使用が急速に広まっている。一方、go 引用形は、go の基本義である音の放出を表す語義から、人の発話の引用へと意味使用を広げてきたもので、思わずクチから出た内容などと基本的に相性がよく、ポンポンと発話を引用するような語りでは say にはない勢いを感じられ、unplanned speech によく現れる。

written language だけに接していると、この種の引用形式に触れることはない。spoken language でも、映画やテレビドラマなどのスクリプトがなどでは、臨場感を出すために意図的に使われる以外は、たいていは排除されてしまう。つまり、unplanned speech ではない英語だけに触れていると、たいていは見逃してしまう種類の表現である。かつては言語分析自体が書かれた言葉

=written language を基盤としていたことや話された言葉=spoken language の実態を調べる有効な方法がなかったことなどから、様々な機能を持った話し言葉の表現にあまり気づかれてこなかった可能性がある。written language にしか触れる機会がなかった時代では、これでよかっただろう。しかし、英語環境がこれほど変わってしまった時代では、spoken language の特性を研究して、言語教育に役立てる必要があるだろう。このような観点から、unplanned speech に特徴的な直接引用の形式について考察を行った。

Reference

- Butters, Ronald (1980) "Narrative go 'say,'" *American speech* 55, 307-304
- Butters, Ronald (1982) "Editor's note on ['be+like']," *American speech* 57, 149.
- Blyth, Carl, Sigrid Recktenwald and Jenny Wang (1990) "I'm like, 'Say what!' A new quotative in American Narrative discourse," *American Speech* 65, 215-227.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy (2006) *Cambridge Grammar of English*, Cambridge University Press.
- Cukor-Avila (2002), "She say, she go, she be like: verbs of quotation over time in African American vernacular English," *American Speech* 77.1, 3-31.
- Ferrara, Kathleen and Barbara Bell (1995) "Sociolinguistic variation and Discourse Function of Constructed Dialogue Introducers: the Case of *be+like*," *American Speech* 70, 265-290.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*, Chicago University Press.
- Tagliamonte, Sali and Rachel Hudson (1999) "Be like et al. beyond America: the quotative system in British and Canadian youth," *Journal of Sociolinguistics* 3.2, 147-172.

- Tagliamonte, Sali and Alexandra D'Arcy (2004) "*He's like, she's like*: The quotative system in Canadian youth," *Journal of Sociolinguistics* 8.4, 493-514.
- Tagliamonte, Sali and Alexandra D'Arcy (2009) "Peaks beyond Phonology: Adolescence, Incrementation, and language Change," *Language* 85-1, 58-108.
- Talmy, Leonard (1985) "Lexicalization patterns: semantic structure in lexical forms," in *Language typology and syntactic description* vol. 3: *Grammatical categories and the lexicon*, edited by Timothy Shopen, Cambridge University Press.
- Tannen, Deborah (1986) "Introducing constructed dialogue in Greek and American conversational and literacy narrative," in *Direct and Indirect Speech*, edited by Florian Coulmas, 311-32, New York: de Gruyter.

¹古い文献では代名詞でも倒置されることがある。そのため英語母語話者には"...," says he といった形式は archaic に聞こえる。

²He thought to himself, "Should I do it?"のような事例があるが、think to oneself は変異形で熟語的な表現である。

³say という行為には移動が感じられるために、項構造上で移動動詞との並行的な関係がある。純粋な移動動詞と比較してみよう。

- (i) a. She yelled at him, "Watch out!"
b. She said to him, "Don't do it."
c. She told him not to do it.
- (ii) a. She threw a stone at a dog.
b. She threw a ball to the boy.
c. She threw him a ball.

(ia)は(iiia)と平行性があり、at により言葉を「投げつける」イメージが想起される。また、(ib)は(iiib)と平行性があり、言葉を相手が「受け取ってくれるように投げる」イメージを想起させる。しかし、(iib)がボールをキャッチしたことを必ずしも含意しないように、(ib)は「伝わった・理解された」ことを必ずしも含意しない。一方、(ic)は(iic)と平行性がある。(ic)は、言葉が「キャッチされた・伝わった」ことが含意され、それ故に伝達動詞であり、聞き手は直接目的語として現れなければならないのである。

⁴音声様態動詞の roar が経路表現をとると純粋な移動の読みを持つことがある。例

えば、次の例では、*roar* が経路表現である *across NP* と共起している。

- (i) a. The truck roared across the desert.
b. The lion roared across the river.

(ia)は *roar* に *go* が重ね合わされているが、「トラックが爆音を立てて砂漠を横切った」、つまりトラック自体が移動した意味である。しかし、(ib)には「ライオンがうなり声を上げて、川を横切っていった」という解釈はない、「川越しにうなり声を上げた」読みしかない。(ia)のような移動の読みは、主語の動きに付随して発生する音声の場合に限られる。

⁵このような意味的に異なる二つの要素の重ね合わせを初めて指摘したのは Talmy(1985)である。Talmy(1985)は、例えば、*The bottle went under the bridge* に *The bottle flowed* が重ね合わされて、*The bottle flowed under the bridge* という形式ができる、と考えた。日本語では、このような重ね合わせ(*conflation*)が困難で、「(～へ)浮かびながら行く」のように、様態と移動動詞が分かれてしまう。

⁶*roar* や *snarl* が(3a)や(3c)のように使われているからと言って、*say* と同じ項交替が可能かと言えば、相当程度制約がある。例えば、*He said to them that ...* のような間接引用形は *say* においては常に許されるが、重ね合わせのタイプでは状況が異なる。*He roared that...* は可能であっても、*He roared to them that...* のような聞き手が現れる構造は文法の作例でしかないだろう。それは様態の重ね合わせと、聞き手の明示が二つそろると情報過多になるからではないかと思う。

このような *roar* が *say* として使われる事実を説明することに対立する二つの理論がある。一つは、*roar* などがレキシコン・レベルで語義拡張を起こして、本来的に *say* 型の動詞となっている、と考える語彙意味論の立場であり、もう一つは、*roar* の持つ音声様態の基本義には変化はなく、統語上使われるフレームに意味の発生源がある、とする構文論の立場である。ここでは中立的に、*conflate* されると考えておく。

⁷その他の形態統語上の5つの指標は *discourse marker like*, *stative possessive have*, *modal have to*, *future temporal going to*, *intensifier so* である。

⁸Cukor-Avila (2002) 参照。

⁹"*Like in spoken English*" という項目に記載し、"*Like is commonly used (particularly among young speakers) as a marker of reported speech, especially where the report involves a dramatic representation of someone's response or reaction*" と説明を与えている。

¹⁰Carter and McCarthy (2006)は、*it's like* をある種の事例や類似性を導入する、として、次の例を挙げている。

- (i) a. It's like if you go to another country, you always get muddled up with the currency in the first few days.
b. It's like when I go to the doctor's, there's always loads of people in the surgery breathing germs all over you.

この *it's like* は、直接引用を導いていないが、共通性はある。

¹¹インタビュー資料は English Journal のインタビュー記事を利用した。調査したのは 2002 年 8 月号から 2010 年 10 月号までで手元にある号 59 冊の中のインタビュー記事とし、非母語話者へのインタビューや講演記録などの音声は全部除外した。時間数は約 25 時間程度である。

¹²語りの中の直接引用を引用符で囲んだ。また、事例末尾の数字は[西暦下 2 桁_月_頁]の順で English Journal での抜粋部を指している。

¹³(9)は(7)とは別のインタビューで、3 年後のものである。Cameron Diaz は be like を立て続けに使用するタイプである。それは彼女が出身、性別、年齢といった指標で be like 引用が多用される demographic な層の中心に居ることと、インタビューではたぶんに「地で」語っており、彼女の talking style の影響もあると思われる。

¹⁴Carter and McCarthy (2006)では、この用法を be like と同様に並記している。

¹⁵”constructed dialogue”は、Tannen(1986)の用語で、直接引用(quoted speech)に代わる用語である。直接引用というが、実際は文字通り話された言葉を繰り返しているのではなくて、「話者の立場から構成されたもの」にすぎないということからの命名である。

¹⁶New Oxford Dictionary of English の記載には、若干一貫しないところがあるが、少なくとも go 引用形を次の例と並べている。

- (i) a. Make sound of a specified kind: *The engine went bang.*
- b. (of a bell or similar device) make sound in functioning: *I heard the buzzer four times.*

直接引用を導く go は、(i)の用法や The slogan goes のような事例の go とは類似性があることは確かだが、主語は人間の発話者である点で大きく異なる。

¹⁷小説など書かれた語りでは tell が直接引用を導く場合はある。ただし、その場合でも、単なる発話ではなく、「相手に伝えた」といった語感がある。次の例は、新聞記事であるが、脅しがちゃんと伝わった文脈であることが分かる。

When a skittish policeman reached for his gun, one woman told him, “If you hit one of us, you’ll not leave here alive.” He backed down. (The Washington Post, Nov. 24, 2010)